

午前
4時

舞台上にはアンティーク調の食卓が2セット、置かれている。

俳優の発した声はリアルタイムで音声入力され、背後のスク

リーンに文字として投影される。それは機械の聞き間違

いによって、いつも少し正確ではない。

劇作家 (客席に) 聞こえますか? 大丈夫ですか? (背後の文字

を確認して) 聞こえてますね。僕は今さっきこの街に來たばかりです。新幹線に乗って。出張みたいなビジネスマンが前の席に座っていました。東京に比べて、少し暖かいかな。小説を読んでいたんですよ、久しぶりに。最近、あまり読まなくなっちゃったから。新書とか、そんなのばかり読んでる。読んでもSMとか。わかりますか? 何というか、あまり人間とか、人生とか、そういうものの意味について、考える余裕なんてないじゃないですか。そんなのは暖炉の前で、馴染んだソファに座って、犬でも撫でながら、考えたいものだと思うんですけど、今そんなことができる人なんてごく一部だろうし、つまり僕は仕事がすっかりなくなっていました。僕は劇作家をやっています。本当だったら年明けから、韓国から來た演出家と一緒に作品を作る予定だった。でもこの状況で來られなくなった。その人とはZOOMでちょこちょこ話したけど、なんだかそれも白けてしまって、結局全部、何もやらないことになったってわけ。友達ともあまり会わなくなったり、東京にいたっ

ない。お腹が空いた。しかも街なかから少し離れてしまった。このあたりに何か食べるところなんてあったっけ。古い喫茶店ならあったかもしれない。オムライスだの、ミートソースだの、そういうものでも食べたい。でもその喫茶店には張り紙が出ている。しばらくお休みすると、少し乱れた手書きの文字。お年寄りばかりだし、しょうがないんだろう。どうしようかと思ったら、その隣のお店にも、コーヒーという文字が見える。人は見えないけれど、シャッターは開いているし、一応明かりもついている。見た目は古そうだけど、こんな喫茶店、あったっけ。とはいえ、今はここに入るしかないの
で、僕はそこでご飯を食べることに決めた。こんにちは。

誰かいます。

劇作家　こんにちは。(間) やってないんだろうか。でもすぐ諦めるのは、癪だ。なにしろ僕はたいぶ歩き回って、そもそも疲れているのだから、ここに座らせてもらおう。

劇作家は片方の食卓につく。

劇作家 （壁を見て）絵だ。随分立派な絵だな。何が描いてあるのかは、ちょっとわからないけど。見たことがあるような気がしなくもない。僕は現代アートには明るくないから、それでも見たことがあるとしたら、かなり有名な人なんだろう。でも印刷には見えないし、本物か、とてもよくできた贋作かもしれない。正直に言って、この店内に合っているかというと、ちょっと不釣り合いに見える。

奥から店主が出てくる。店主もマスクをしている。

店主 あっ、すみません、いたんですか。ごめんなさい気づかなくて。

劇作家 ここ、喫茶店ですか？

店主 すみません、（劇作家が座っていない方の食卓を指して）ここに移動してもらってもいいですか？ すみません、そっち、売り物でして。あとそれ、消毒、お願いします。

劇作家 （入り口の方へ行き、手をアルコール消毒する）ここ、喫茶店ですか？

店主 家具を売っているんですよ。

劇作家 そうなんです。コーヒーもあるんですか。

店主 そうなんです、コーヒーもあるんです。

劇作家 食べるものがあります？

店主 食べるものはちょっと今。あっ、(ポケットからパンを出して)業者から試供品でもらったパンがあるんですけど、よかったら、どうぞ。

劇作家 いいんですか？ やったあ！

店主 いずれパンもあつたらいいと思ってるんですけど。

劇作家 (パンを二口食べて)おいしいです、このパン。

店主 ちょっと固すぎませんか？

劇作家 固くてもおいしいですよ。あとコーヒーもくたさい。

店主 はい。

店主は店の奥へ行く。劇作家は最初とは別の食卓につく。

店内のスピーカーから Harold Budd & Brian Eno のアルバム

——The Pearl——が流れ始める。

劇作家は残りのパンを食べている。

劇作家 このピアノを弾いている、ハロルド・バッドという人が、最近死んだ。

店主 コーヒーを持って出ている。

店主 （劇作家の前にコーヒーを置いて）私はこの家具屋で三代目なんですけど、先代はもうほとんど隠居しちゃったし、お店を任されたものの、今どき家具屋なんて流行らないし。人が来たら何か変わるんじゃないかと思って、ちょうど座り心地のいい椅子もあるし、ショーケースみたいな

つもりで、飲み物を出すサービスを始めてみました。急に思い立ったんですよ。ウィルスのせいで、なんとなく世の中が閉塞的になったじゃないですか。うちのお客さんは、もともとそんなに多いわけじゃないし、私自身にはそんなに変化はないんですけど、気持ちも沈んじゃうし、何かやったら私にとってもいいんじゃないかって思ったんですね。今は週に2日くらいこういう形でやってるんですよ。やっぱり、あんまり人はこないですけど、時々ふらっと、全然知らない人が来るので、そういうときは嬉しいですね。遠くから来たんですか？

劇作家 東京にいたんですけど、なんか嫌になっちゃって。もともと生まれはこっちなんですけど。

店主 どれも嫌ですね。人それぞれだと思いますけど。

劇作家 小さい頃はこの辺も、もつちょっと賑やかだった記憶がある。

店主 私が地元に戻ってきたときにはもつこんな感じでした。一

度名古屋で就職したんです。一年ベトナムにいて、それから戻ってきました。どこも競争ですから、同僚は早いうちにやめちゃったんですけど、だから私はっかり大変で、よくもったなと思いますね。

劇作家 ベトナム、行ったことない。

店主 いいところですよ。

劇作家 いいところですか。

店主 はい。

劇作家、コーヒーを飲む。

劇作家 ベトナムのコーヒーですか。

店主 いや、違います。

間。

劇作家　だいぶ立派な絵ですね。

店主　いともなんです。

劇作家　ああ。

店主　私が店を継ぐときに、もらったんです。すごい嬉しかったんですよ。絵なんて、なかなかもらわないじゃないですか。こんなに大きい絵。

劇作家　何が描いてあるんですか。

店主　それはちょっとわからないですよ。わかりますか？

劇作家　いや、ちょっと。

店主　いとこが、大きい美術展に絵を出すことになって、それは正確に言うとか、絵じゃない何か、ごちゃごちゃしたものを組み合わせたやつだったんですけど、この絵はそのときの、試作品というか、描いたけど違うってなって、お

蔵入りになったものみたいで、でもコンセプトには合わないけどこれ自体は気に入ってたんだって言うてて。

劇作家

僕それ、見たかもしれないです。

店主

へえ、今度会ったら伝えておきますね、喜ぶと思うんで。

劇作家

その美術展にはいろんな国からの作家が参加していた。そもそも作品を選ぶ、芸術監督すら、海外から招いたのだった。評判はよかった。僕もそんなに熱心じゃないし、半分以上くらいしか回れなかったのだけど、それでも満足感があった。そのときは世界で一番の関心事は、政治や経済や、いろんな分野における分断だった。それはアジアであってもヨーロッパであっても南米であっても、起こっていた。どうしたら繋がりを取り戻せるかということを、みんな真剣に考えていた。作家たちは軽やかだった。それは決して予算の潤沢な企画ではなかったと思うのだけど、なにしろエネルギーはすごかったし、記憶によればこの人のいとこの作品というのは、資源の枯渇してしまった島をリサーチして作られたものだった。その島で採掘された資源は先進国

の大農場に使われるわけだけど、世界人口は増え続けるわけだから、資源はますます必要になり、だからその島は大いに栄えたけれども、資源はあっという間に枯渇し、衰退してしまふ。その作品には、もうすでに失われてしまった、その島の伝統的なパターンが用いられていた。

A、登場。マスクをつけている。劇作家の座っていない方の食卓につく。

店主

私はベトナムでは、主に日本の企業を相手にしていました。つまり、日本のメーカーというのは、アジアの他のいろいろな国で、ものを作らせているわけです。だから日本の人というのはそれなりにいて、私のいた会社はそういう人たちに、色々現地の業者を紹介していたのです。私はその、メーカーの人たちと話す機会はたくさんありました。私の具体的な想像もできない大きな数字がたくさん出てきました。その話している人たちも、きっと現実感なんてなかったんじゃないかと思います。不満そうな人はたくさんいました。そこに人間はたくさんいるのに、自然だって文化だってあるのに、何も動いている実感はなくて、ただ数字だ

けが、増えたり減ったりする世界です。私は次第に休みの日にも、あまり外出しなくなりました。なんとなくそうなっていたんです。違法でネットに上がっているドラマやアニメをよく観ていました。私にはそのとき日本はすごく景気がよくなって、まるでバブルみたいで、みんなお金をたくさんもらえて、どんどん幸せになっていくように見えていました。総理大臣は思い切った改革をいくつも実行して、たしかに、あまりぱっとしないおじさんでしたけど、それでも経済はよくなっていくから、印象はなんだか良かったと思います。早く日本に帰りたいと思いはじめて、最後の数力月ほとんど記憶がありません。春になって、私は日本に帰ってきました。それからいくつか仕事を片付けて、ゴールデンウィークには実家に帰りました。私は街は昔よりはにぎやかになっているだろうと、なんとなく思っていました。実家の稼業も、それなりにやっているだろうと考えていたのです。ところが、別にそんなことはなくって、むしろどちらかといえば、悪くなっていたのです。私には意外でした。でもよくよく考えれば、そんなことは意外でもない、大いところが儲かれば儲かるほど、私の実家みた

いな小さいところは、そのぶん割りを食ってしまうわけです。そのことに気づいたとき、私がいよいよ外出しなくなつた、あのなんとなくだるいような感覚というのは、間違ひではなかったと思います。つまり、こんなことしていたら体に悪い。昔からのお店が閉じてしまっているのを見て、私はランニングシューズを衝動買いしました。翌日の日の出ごろ、ここからずっと海のほうまで走って、その日は曇りでしたが、だいぶ苦しい息をしながら、私はもうちょっと考えなければいけないと思いました。ご存知だと思いますけど、ここから海までというのは、なまった体でいきなり走るにはちょっと無理な距離です。次の日私は筋肉痛で動けず、一日美家のソファに寝ながら、猫を撫でていました。ランニングシューズはその日以来一度も履いていませんが、私は今こうやって家具屋を継いでいるわけです。

僕がこの街にきたときはまだウィルスはさほど騒がれていなかった。それはあくまでも、遠い大都市の話にすぎなかった。

僕の生まれつきの流れに任せる態度のせいでこんなことになっている。最初に就職したときはリーマンショックで大変だったのに、適当な考えでいたからろくでもない会社に入ってしまった。あっちこっちに出張に行かされて、休みも何もなく、帰ったら大体深夜で寝るだけの生活だった。それでも若かったし社会なんてそんなもんたろうと思って、結局数年は働いたのだけど、直属の上司が会社の金を使い込んでいて、辞めたぶんその仕事が全部僕のところに来て、しかも会社からは何のフォローもなかったから、いい加減にうんざりだと愚痴をこぼしていたら、大学の先輩が新しく会社を立ち上げるからと言って誘われた。その先輩は頭も回るし勘もいいんだけど、なんというか人格に問題があって、長くつきあっていたのは僕しかいなかったから、適任だと思われたんだろう。たった二人の会社だから、あらゆる細かい仕事も全部自分たちでやった。というより、ほとんど僕が一人でやった。主な仕事は、その人が起こしそうなトラブルを未然に防ぐために、いろいろな根回しをする事だった。ストレスを感じることは多かったけど、なにしろ週に2日はまるまる休めるし、残業も常識の範囲

内だった。その先輩もアイデアはいいし、発言も面白いので、たまに Webメディアに取り上げられたり、ツイッターのフォロワーもそここいたりで、会社自体は成長していた。2、3度炎上して、それは今でもまとめて読めるけど、そのことは会社にとってダメージどころか逆に収益をもたらしたのだった。先輩は調子にのっていたけど、僕はあまりいい顔をしなかったものだから、少しはおとなしくなって、それから炎上らしい炎上はしていない。粘着してくるアカウントはあったけど、実際に目に見えるわけじゃないし、それに、炎上商法に頼らなくても会社は十分うまくいっていたのだった。最初のマンションから、ちゃんとした事務所を借りて引っ越しをした。社員は相変わらず2人だけだったけど、知り合いを通じて、アルバイトを3人ほど雇った。3人とも要領がよくて、素直ないいメンバーだった。一緒に社員旅行にも行った。冬の、小笠原の島に一週間。一番の目的はザトウクジラを見ることだった。そのとき我々の取り組んでいた、新しいプロジェクトのモチーフはザトウクジラで、ジャンプする姿がロゴにもあしらわれていたのだった。ザトウクジラは遠目にちらっと見えただけで、ましてやジャンプなんて見れなかったのだけど、それ

でも海や空はきれいで、我々は満足して帰った。船の中で。そろそろ東京が近いという頃、ニュースが流れていた。どこかのクルーズ船のニュースだった。どうも恐ろしい話のようだった。内部の様子はあまり出回らなくて、主にSNSでリークされていた。僕はおがさわら丸の船室にいながら、息がつまったように思った。例の先輩が、しばらくスマホを眺めていたと思ったら、急に深刻な顔つきになって、黙りこくってしまった。そのとき彼が何を考えていたのかはわからないが、それからが大変だった。社員旅行から帰ってしばらく経ったある日、いきなり会社をたたむと言い出した。新しいプロジェクトは動き出したばかりで、投資もそれなりにしていたし、引き返すにはどう考えても最悪のタイミングだったのだけど、頑として聞かない。理由を聞いても要領を得ない。責任は俺がとるとかなんとか。正直僕はそのとき、先輩の脳に新種のウイルスが入っておかしくなってしまったんじゃないかとすら思った。数ヶ月忙殺されて、気がついたら僕はからっぽの事務所にいた。たった一人で。しかも夜中だ。理由もなく涙が出てきた。遠目にクジラがかるうじて写っている、たいしてうまくもない写真を、印刷して壁に貼っていて、最後まで

で剥がせなかったのを、そのときやっと剥がした。お腹が空いて、しばしば通っていたラーメン屋さんに行った。世間では夜の街という言葉が、まるで悪者の名前のように扱われていて、よく立っているキャッチのお兄さんも、どことなく目がうつろった。ビールを飲んで、家に帰る気もなかったのだけど、行くあてもなく、結局最近営業を再開した、ネットカフェに朝までいた。チェンソーマン、出た分、ぜんぶ読んで。家に帰る道すがら、僕は、フォーク・クルセダーズの「悲しくてやりきれない」という歌を、ずっと歌っていた。思えばあれは親が好きたった。「(歌う) 胸に……」

B、登場。マスクをしている。Aの後方に立つ。

A
「(歌う) 白い……」

間。

A
「(歌う) 深い……」

A

生まれた街に帰ってきたのは、深い理由もなかったのだけど、すぐに次の仕事を探そうと思っても、ろくな仕事なんてないんじゃないかという直感があったのだった。誰も来年のことすらわからない、なにしろそれだけウィルスは未知だった。貯金はほちほちあったから、失業手当が切れても多少は大丈夫だろうし、その間に次どうするかゆっくり考えようと思った。なにしろ、このままだとまた同じ失敗を僕は繰り返すだろうと思った。そもそも、僕は昔のことなんて忘れかけている。10代のころの自分なんて、すっかりおぼろげで、他人にすら思える。でもそれは実は危険で、過去は無意識の中にこびりついて離れないのだ。このままでは、ずっと囚われたままだろう。とはいえ、大層な過去があるわけでもない。彼女は当時から仲がよくてまだ連絡をたまに取り合う、唯一の友達だった。

B

あそこにマツキヨできたんだね。

A

えっ、あそこ前からマツキヨだったよ。

B それ昔でしょ。そのあと一回なくなって、また新しくでき
たんだって、同じとこに。

A そっだったっけ。

B マツキヨ、あっちに移ったんだよ。

A あっちのマツキヨ、まだあったよ。

B まだある。

A 行きたいお店あってさ、グーグルですごい評価高かったん
だけど、どうせこんな状況だし予約しないでも入れるかな
と思ったらさ、さっき通ったらめっちゃ人いて。狭いお店
なんだけど。混んでは混んでんだね。尾張屋…？
小樽屋…？ そのへん一本入ったところの。なんとか横
丁って。まさか入れないとは、思ってたかったな。

B どこでもいいよね。

A

うん。

A、B、食卓を居酒屋のテーブルに見立てて座る。

二人ともマスクは着けたままである。

B

生をふたつください。

A

枝豆ください。ここの居酒屋はたぶんミスの居抜きだ。当時、僕は彼女とはたまにこのミストに来ていたはずだ。ギターケース持って……僕の方だけ。僕らは軽音部に入っていた。何で仲がよかったかと言えば、たまたま、同じような音楽が好きだった。とは言っても、2つか3つくらいだったけど。僕らの世代でいえば、かのニルヴァーナすら、聴いてるやつなんて学年に5人しかいなかったし、ましてや、ジーザス・アンド・メリーチェインなんてなおさらだったわけだ。地方都市の高校生に独特の、特権意識というのがあって、何か俺たち特別だよな、みたいな。もちろんそんなやつなんて世界に5億人くらいいるし、でもそのときはそんなこと知らないから、一応部内のバンドでは、ラッドウィンプスとかやっていたけど、たまに二人で街のスタ

ジオ借りて、彼女はドラムで、僕はギター弾いて、とにかくディスコーションかけて、ポリリウムめいっばい上げて、なんというかうるさければいいと思っていて、「ジャスト・ライク・ハニー」とか、そういう歌を演奏していた。あれを演奏しているとき、やたらノイズに包まれて、全部が曖昧になって、人は人なのだからなくなるし、この部屋はスタジオなのからなくなるし、この街はこの街なのからなくなる。霧がかかったみたいな、自分の五感が役に立たないみたいな感じになって、でもそのとき思ったのは、そのときのほうがむしろ、本当のことを予感できるんじゃないかと思った。その霧の向こうを見たいと思う。日常ではそんなことないのに。普段見えているものは本当じゃないのだけど、これが本当だと信じ切っている。だから、僕は普段、本当のことを見ようなんてわざわざ思わないし、努力もしない。でも本当は努力しないと本当のこととは見えない。アンプのポリリウム上げて、全部ノイズにしちゃうと、この表面の嘘の嘘性みたいなものが明らかにになって、努力をしないと本当のことは見えないのだということに気づくし、見たいという感情が、かきた立てられる。もちろん僕のできることは、予感すること、想像すること

しかない。でも予感をもってすればそこにアクセスできるはずだ。予感するためにはモチベーションが必要なんだよ。いわばギターはそのための道具なんだ……。でも社会人になってから、なんとなくジザメリとか、聴かなくなっ
て、最近はローファイヒップホップばかり聴いてる。た
まに実家に帰るとふと懐かしい気持ちになって、あのとき
のmp3データを、再生したりもするけど。ジザメリって
僕タニから聞いたんだっけ。あれ、サイコキャンディー？

B
これ何度か言ってるけど、私まだCD返してもらってない
んだけど。

A
えっそうだったっけ。

B
そっだよ。

A
ごめん。

B
買い直したんだよね、リマスターを。

A 実家のどこかにあると思うんだけど。でもリマスターって矛盾してない？ クリアになったら、駄目でしょ。

B そんなことはないよ。

A そっかな。

B すみません赤ワインください。

A 来る途中に久しぶりに聴いたんだけど、何か妙によくって、全然、違う風に聴こえたんだよね、今までと。正直、本当はそんなに好きじゃないって思ってたんだよ、あのときが特別で、いわゆる、はしかみたいなものだと思ってたんだけど。

B はしかじゃないでしょ。

A うん。

B 最近全然やる気が出ないんだよね、テレワークであんま家

からも出ないし。もともとがフリーランスみたいなもんでしょ。一応パソコン開いて、ネットとか見るんだけど、だいたい適当なマンガ、無料で読んで、もういいかってなって、ストロングゼロ、ケースで買ったのねアマゾンで。あれすごいね無限に家にあるから。

A 働こうとはしてるだけえらいよね。

B えらいですよ、私は。

A 最近元気なんだと思ってたけど。

B 何で。

A ツイッターみてるとき。

B ネガティブなことはあえて書かないようにしたんだよね、ここ最近は。

A そっなの？

B

よくバズるし、フォロワーも増えるんだけど、だんだん病んでる方の自分が大きくなって行って、ちょっと違うなあって思ったんだよね。最初はこれ、逆に健康にいいなと思ってやってたんだけど、なんかどこかで健康に悪くなったね、フォロワー30000超えたくらいからかな。もうちょっと楽しいこと書くようにしようって、意識的にやって、今はそっちの方が楽だからさ。買ったものの写真載せたり。

A

今何人くらいいるの、フォロワー。

B

1万ちょっとくらいじゃない？

A

えっ、そんなに増えた？

B

なんか増えた。

A

1万っていったらあれじゃない？ 糸井重里くらいじゃない？

B

糸井重里全然もっというよ。

A

津田大介くらい？

B

津田大介知らないけど。すみません、赤ワイン。つまり、違うのだと、ツイッターと、自分は。自分自身は全然、1万人みたいな数字が似合うような人間ではないし、あくまでそれは別の存在なのだけど、でもインターネットってもともとそういうものだったはずで、そのことがいつの間にか忘れられていったと思うんだよね。自分を拡張したら、終わりだと思わない？ 人間の脳は、そんな状態に耐えられるようにはできていない。自分はあくまで自分であって、それはこの、小さい体の、狭い範囲にしかない。でもそれをキープするっていうのはめちゃめちゃに大変で、技術が要るから、だってお坊さんっていうのは、修行しないと成れないんだけど、私はそれは日々戦っていて、そういうのがつらいからストロングゼロでドーピングをするっていう、そういう必要性がある。

A

レモン味が好きだな。僕、ストロングゼロでいえば……昔、たまにスタジオ行ったじゃん。本当に好きな曲だけやって。ジザメリとか。マイブラとか？ あのととき、本当に自分な

んていうのは、全然よくわかんなくなっちゃって、でもその感覚ってけっこう覚えていて、でもそれは補正された思
い出なのかもしれないんだけど。

B 木がよくってね、最近は。

A 木？

B 木。生えてる、でかい木。

A 写真上げてるやつ？

B そう。とにかく無駄なくらいに馬鹿でかい木が、よくってね。

A あれどこなの？

B 意外と近くなんだよ。行く？

A 今から？

B 車じゃないと無理だから、明日暇？

A うん。

B 4時集合でいい？

A いいけど。えっ朝？

B 朝にしない？

A そうか。

B じゃあ4時に、前まで行くから。

A 住所送るよ。

A、スマートフォンでBに住所を送る。

B、去る。

A、寝る。

間。

Aのスマートフォンが鳴る。A、起きてそれを見る。

B、登場。マスクをしている。椅子を運転席に見立てて座る。

A、Bの隣に椅子を置き、助手席に見立てて座る。

B 朝ごはん食べた？

A 食べてない。着替えてもないし。

B そこにコンビニあるから、停めようか。

A、車から出る。

B 私車にいるから、コーヒー買ってきて。

A、去る。

間。

B、音楽をかきぬ。

A、両手に缶コーヒーを持って戻ってくる。助手席に座る。

A (コーヒーを渡して) はい。

B こっちの方だと思ってなかった。せっかくコンビニに停めたのに。朝ごはん買わなかったの？

A わりといつもこれが朝ごはんなんだよね。

B 私そついうのけっこう理解できないな。

A 懐かしいやつだ。

B 生まれる前の音楽なのね。

間。

B 私は生きている中で、いつこの音楽を聴いても、自分との

距離は変わらないはずなのに、だってこれはそもそも私の人生の外部に存在しているのだから。歴史っていうのは自分が生きている時間だけでしょ。他のことは全部、時間という概念がなく漂っているだけの、形をもたない、粒子みたいなもので……。

A

でも懐かしいよ。

B

いつでも等しく懐かしいんだよ。

A

こっちの道、来たことない。

B

古い道なんだって。飛鳥時代？ とか。

A

飛鳥時代って、古墳とか？

B

知らない。

A

来たことないっていうの、嘘だ。たぶん小学生の頃、何か

で通った。すごい昔な感じがするな。それこそ、飛鳥時代くらい、昔って感じがする。

B 小学生の頃、何になりたかった？

A 覚えてない。動物は好きだったよ。

B 動物？

A 絶滅した動物が好きだったな、図鑑があつてさ。でかいのとこ、カラフルなのとか……

B 南の島に行くことにして、

A えっ？

B というか、行く流れになったんだけど、ちょっとした縁でいうか、南太平洋のあたりの島で、民間の新しい教育機関を作るんだっていうのがあって……。ほんとうに小さい組

織なんだけど、日本人3人くらいで、そういうのに関わる
ことになって、だから最近はずっとそれ関係の仕事をして
るんだけど。

A
行けるの？

B
わかんない。でも、紹介してくれたのも大学の友だちの友
だちって感じだし、完全に偶然なんだけど、そういう偶然っ
てあるんだなって思っ、でも悪くはないとは思ったんだ
よね、たまには、こつこつ流れに乗ってみるのも。

A
そっかもね。

B
紹介できるよ。人手足りてないし。

A
そっか。

B
プレゼンあるから、今度。ZOOMで。送っておっつか、招待。

A

ありがとう。見るよ。

B

うん。

A

南太平洋か。

B

うん。

A

そうして1時間くらい走って、僕らはその無駄なくらいに馬鹿でかい木を、見た。それは神社の御神木だった。周りの雑木林の中で、その木だけが異常に目立っていた。あまりにも大きすぎて、まさに今にも倒れてくるようだった。もしかしたら、倒れそうなのは自分の方だったのかもしれない。宇宙を想像したときにめまいがするように、その木を前にすると僕は平衡感覚が崩れるような気がした。まだ梅雨は明けていなくて、重たい曇り空で、それはまるっきり非現実的な光景に見えた、本当に帰ってこれるのかどうか、不安になるような。僕らは一応お参りだけして、その日は写真は撮らなかった。それで国道沿いの、駐車場が

広いコーヒーチェーンに入って、お昼前までだらだらしゃべって解散した。

B (去りかけて) 探してくれた？ CD。

A まだ探してない。

B 探しといてね。

A うん。

B、去る。

A 家に帰ると、居間のテレビでローカルニュースが流れていて、それによると、この地方で初めて、ウィルスの大規模なクラスターが発生したという。

A、去る。

舞台出口。

A、PCを持って登場。PCを食卓に置き、開いて、操作する。

間。

A、去る。

舞台出口。

A、お茶を持って登場。PCを操作する。

A、PC操作をやめ、スマートフォンを眺める。

間。

A、またPCを操作する。

A
そんなに興味があつたわけではないけど、一応プレゼンを見るためにZOOMにアクセスして、でもすこし時間が早く

て、まだ入れなかった。一階に降りて、お茶を淹れて、上がってきたら少し時間を過ぎていて、それでも入れなかった。アプリでマンガ読んで10分くらい経って、また見てみたけど結果は同じだった。おかしいと思って、そういえば団体の名前とかは聞いていなかったのだけど、ほとんど開いていないフェイスブックでタニのアカウント調べて、公式のページに辿り着いたのだけど、お知らせで、担当者が体調不良でプレゼンは延期になったことが書かれていた。そういえば、一日中つぶやかれていたツイッターの方が、ここ2日くらい何も更新されていない。体調不良？ ストロングゼロを飲みすぎて二日酔いなものかもしれない。一応連絡を送ったけど、3日経って、何も反応はない、既読すら僕はそれはウイルスではないだろうと思った。もっと感染がひどい場所の知り合いさえ、まだ陽性者は出ていなかった。ほとんど出歩かないと言っていたし、クラスターの起きた店も、とつてい行きそうにないし、不思議な感覚がした。僕はだいたい毎日ツイッターは見ているし、やたら何を食べたとか、何を買ったとか、知ってしまったて、あまりにつながりすぎているように思った、彼女に限らず、あら

ゆる人たちと。僕はそれが息苦しいときもあったし、あえて見ないように努力さえすることもあるんだけど、そのつなかりは、本当はあまりに弱すぎて、こういうときに、放り出されたような感じはある。

間。

A パソコンはやめる。スマホも置いて、散歩に、それがたぶん一番いい。

A、立ち上がり、舞臺をうろつく。

A 結局海まで行った。家から海は遠かったけど、途中でバスに乗って、なんで海なんか来たのか、昔はけっこう、嫌いだったのに。

A、マスクを外す。

A 誰もいなかったから、声を出してみた。大きな声を出すな

んて、マスクなしでなんて、久しぶりだった。ウィルスに
関係なく、大きな声なんて、出さない。体の内臓が悲鳴を
上げるような、筋肉がきしむような感じがして、それは本
格的なストレッチをやったみたいに、気持ちよかった。

A、マスクを着ける。

A

街に戻って、喫茶店に入った。コーヒーを頼んで、それは
何年か前から流行っている酸っぱいやつで、ぬるかったけ
ど、エスラジオが流れていた。スマホもないせいで、ただ
ラジオを聞くしかないっていうのは、久しぶりに、贅沢な
時間だったかもしれない。リスナーのメッセージが読まれ
て、過去の失敗談みたいな安全なやつで、何か流行ってる
曲が、イタリアのブランドの名前がサビに使われている変
な曲だったのだけど、そのとき初めてちゃんと聴いて、そ
れでニュースが挟まって……。

問。

A

そう、その日のトップニュースは、ある若い俳優に関するものだった。僕とそう歳の変わらない、何度かはテレビドラマで見た、スタイルのスラックとした、俳優。僕はそんなに思い入れがあるわけじゃなかったけど。

間。

A

A、スマートフォンを取る。寝転がってそれを操作する。

僕は家に帰ってからずっとスマホを見ていた。取り憑かれたように。あるツイートが拡散していた。韓国の報道では、「極端な選択」と言うそうだった。おそらく直訳なんだろう、固い感じの、声に出しづらい、響き。「極端な選択」。きっとこのままでは日本語になじまない。僕には使いにくいだろうと思った。「極端な選択」。極端だろうか。むしろ自然なんじゃないのか。普通に生きていけば。そうだろう。誰が平気でいられるだろうか。悪夢はよく見るだろう。逃げ場所なんて、みんな探している。逃げたいっていう気持ちだけは、いつでもあるだろう。どこでも、強いアルコールでも、

それで済めばいいけど、逃げ場所なんていつだって奪われている、何に？　ちょっとずつ、無意識な悪意が積み重なって、誰にとっても行き場のない、呼吸のできない場所になったな、生きていることそのものが、まるで誰かの慰みものにでもされている気分だ。僕はCDを探さなきゃならない。でもそれは見つからないだろう。どこを開けても、どの記憶をたどっても、CDはない。なかった。それは本当に僕だったか？　CDを借りたのは、記憶違いじゃないか、彼女の、その可能性だって、まったく、ゼロじゃないと思うんだけど……。僕は自分のツイッターの、30人くらいしかフォロワーのいない、鍵がかかっているアカウントに、とにかく無駄なくらいに馬鹿でかい木が見たくなったな、とつぶやいた。もう深夜だ。

A、寝る。

A
……眠れない。

A、スマートフォンで音楽をかける。

しばらくそれを聴く。

A、音楽を止める。

間。

Aのスマートフォンが鳴る。A、起きてそれを見る。

A えっ、……今から？

A、去る。

劇作家登場。マスクを着け、カートを引いている。

劇作家 これを書いているのは2021年の1月で、今から話すのは、それから先の話なので、事実とは異なる可能性があるのだけど……。友人から急に、今月中に作品を作らなきゃならないから手伝ってくれと言われて、東京に戻ることにした。給付金のもらえる期限が月末なのだそうだ。まあまあお金がもらえるということだったので、暇だし、断る理由はなかった。オリンピックはもうほぼ中止ということで報道がたくさん出ていたから、空気も変わっているだろう。相変わらずウィルスは蔓延していて、一日1000人以上は罹っているのだけど、むしろ一時期より減ったねというので、樂觀的な雰囲気すらある。恐怖がインフレして、む

しる麻痺している感じだ。確かに、ずっと恐怖しては参ってしまう、麻痺するのも、健康の知恵でもあるかもしれないと思う。

劇作家、去りかばい、立ち上がる。

劇作家 新幹線乗り場に向かう途中、印象的な出来事があった。そこにはピアノが置いてあって、誰でも弾くことができる。たまに上手な人が弾いているし、コンサートツアーで来たプロが戯れに弾くことすらあるそうなのだけど、その日に弾いていた人は、とても下手だった。ちょっとは習ったのかもしれない。でもまともに弾ける人ではなかった。その人は、パッヘルベルのカノンを、つかえつつかえ、主旋律だけ弾いていた。記憶の中のメロディを、なぞるように、でもピアノはうまく言うことをきかないから、思った音が出なくて、調子外れになる。そのたびにその人はやりなおして、だんだん、そのメロディを形にしていく。たどたどしくて、うまくいかない進行だったけど、それを聴いてい

ると、僕はむしろ、その音楽を本当に聴けているような気がした。パッヘルベルのカノンなんていうのは、それこそ今までに何百回と聴く機会があったと思うのだけど、それはあくまでも、その演奏家がそのとき鳴らしている音としてのカノンにすぎなかった。つまり本当の音楽というのは、パッヘルベルの頭の中にしなくなると、いやもしかしたらそこにもないのかもしれないのだけど、演奏している音はあくまでその仮の姿に過ぎなくなると、でもその仮の姿をこそ本当だと思い込みがちだ。僕はそのとき、たどたどしく、何かを探るように弾かれているメロディーを聴いていて、なんだかその人と一緒になって、本当の音楽に辿り着こうともがいている気分になった。それはただの予感として、感じられるだけなのだけど、本当のことは予感ではない。僕はその人の顔は見なかった。見ないほうがよかったと思った。見てもマスクで隠れているだろうけど、僕はその人と、距離もあったし、でもピアノの音を聞きながら、まるで共犯関係みたいのに、何かをやるうとしていたんだと、そういう気分だった。

間。

劇作家　じゃあ聴いて下さい、パッヘルベルのカノンです。

何も聴こえない。

劇作家、去る。

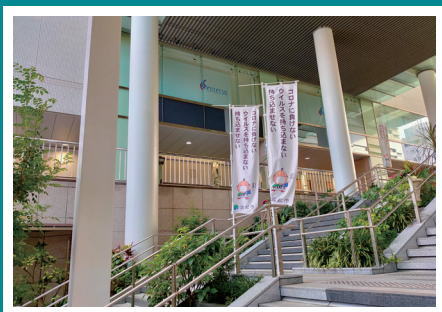
幕

あとがき

戯曲『午前4時』は、浜松市にある「ゆりの木通り商店街」の企画「ゆりの木オーブン」の一環として執筆されたものです。商店街から依頼を受け、2020年12月8日から一週間近く滞在しつつ、人々の話を聞き、街を見て回りながら構想を固め、それから翌年2月にかけて戯曲という形にしました。

リサーチを基にしながらも、内容はフィクションです。戯曲に出てくるような人物、お店は存在しません。コロナ禍の日々を過ごしつつ、東京から浜松に移動して人の話を聞きながら浮かんできたイメージ、物の見えかた、そういったものを演劇のフォーマットに落とし込んだときにどういう形になるかということを実践したつもりです。

この時期に読んでいた本の中に、直接経験と間接経験という言葉が出てきました。直接経験とはそのまま、実際に自分の身体で得る体験のこと。間接経験とは記号や情報



浜松駅前 (2020.12.9)

を通じて得られる、いわば擬似的な経験です。コロナ禍においては、マスクやフェイスシールドのために表情や言葉は不明瞭になり、コミュニケーションの直接経験はノイズにまみれてしまいます。その代わり、Zoomをはじめバーチャルでの経験、いわば間接経験の総量は圧倒的に増えました。この変容した身体感覚を抱えながら、子供の頃から慣れ親しんだ浜松の街を歩き、人々と話す中で、でもこの曖昧さ、霧のかかったようなノイズの中でこそ触れられるような何かがあるはずだという、希望めいたものを信じた気持ちが生えてきました。今回の戯曲を書く大きな原動力となったのはその感覚です。

もうひとつの大きな発見としてあったのは、街の人たちの話を聞いていて感じたことです。当然のことながら今の状況というのは急に現れた特別なものではなく、ずっと以前から続いてきた大きな歴史の一時点にすぎないということです。コロナ禍はウイルスによって触発された、これまでの歴史のひとつの表れであって、ここで問題にされるような



新浜松駅前（2020.12.9）

ことはもっと前からあったことから出発して考えないと捉えることができない。街の衰退の話をする方は多くいました。それはちょうど歴史的な話で言えば、大量生産・大量消費、新自由主義、グローバル化のの流れと合致します。そうして生まれてきた歪みが、ウィルスによって別の様相を見せたのがこの現状なのではないか。そのことが、知識というよりひとつの体験として感じられました。そして以前から個人的にも強く感じていた現代社会の「体に悪い」感覚と併せて、今の自分の気分として戯曲の中に反映されていると思います。

今回のお話をくださった企画責任者の大東翼さん、サポートしてくださった万年橋パークビルの鈴木基生さん、滞在中お世話になったシェアハウスのみなさん、デザイナーの桑田亜由子さん、お話を聞かせてくださったゆりの木通り商店街のみなさまに感謝の意を表します。ありがとうございました。

カゲヤマ気象台



浜松駅構内 (2020.12.9)



スターバックス浜松城公園店内 (2020.12.9)



中日新聞 2020年12月9日朝刊



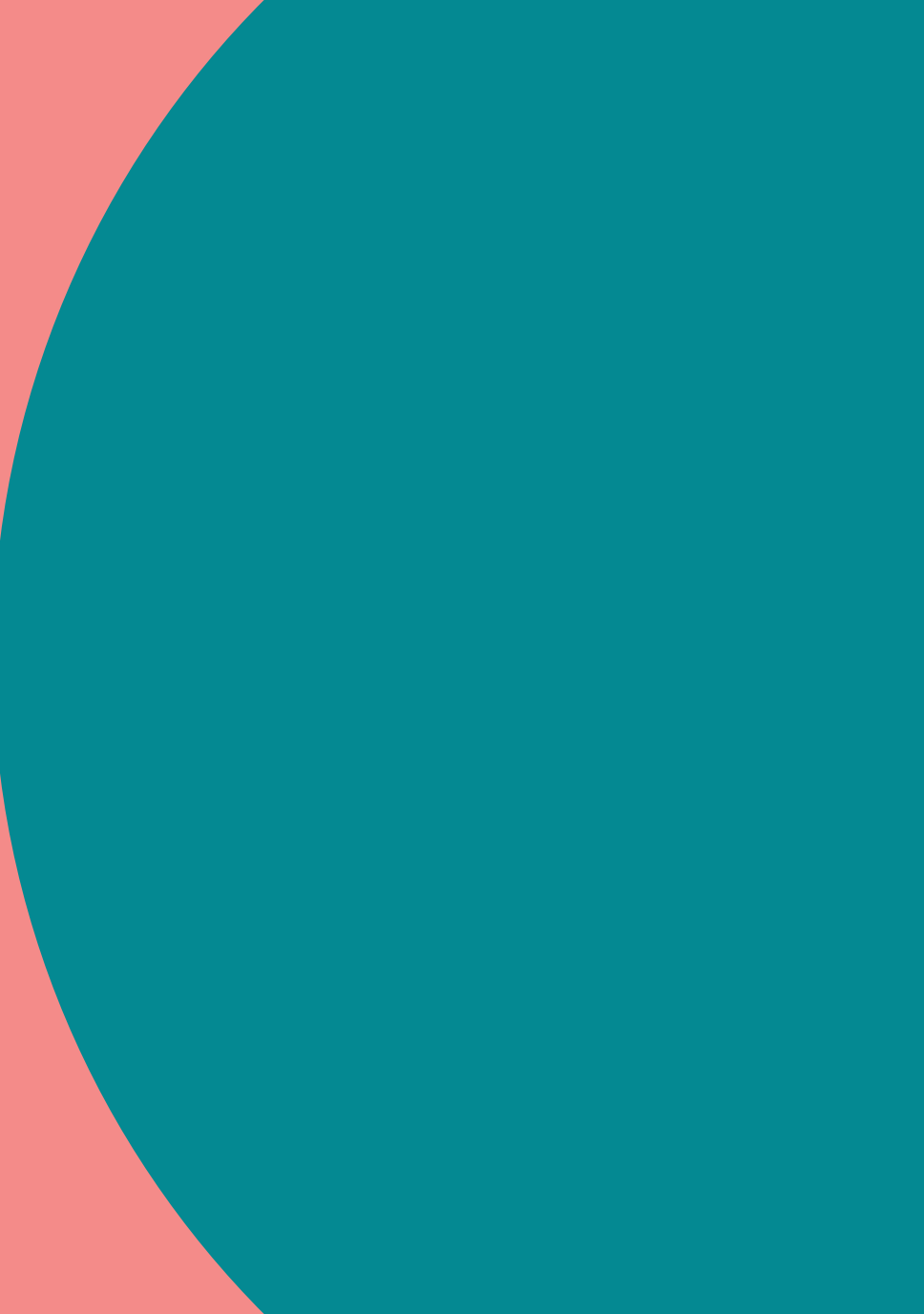
浜松駅前 (2020.12.14)

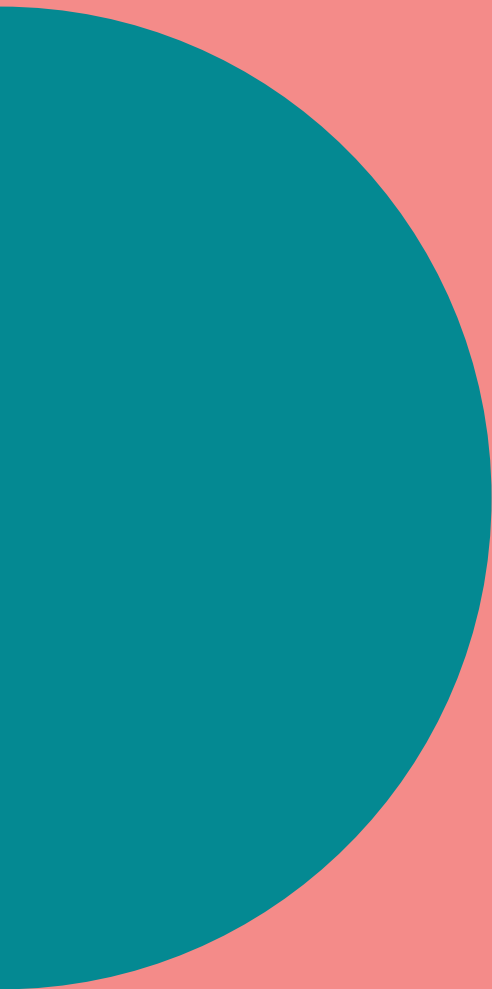


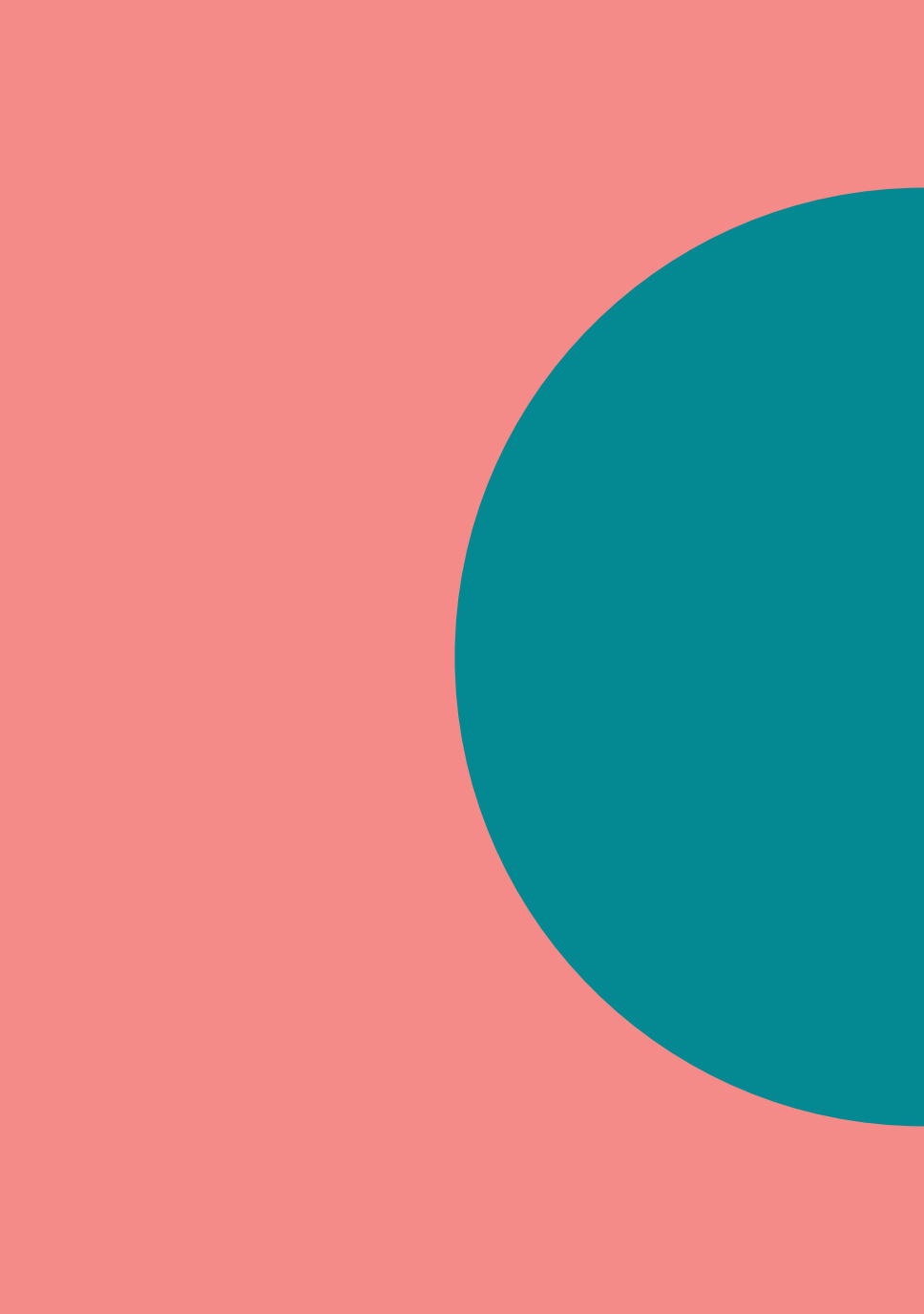
谷屋屋浜松本店店内 (2020.12.11)

カゲヤマ気象台

1988年静岡県浜松市生まれ。早稲田大学第一文学部卒。2008年に演劇プロジェクト「sons wo」を設立。劇作・演出・音響デザインを手がける。2018年より「円盤に乗る派」に改名。2013年、『野良猫の首輪』でフェスティバル／トーキョー13公募プログラムに参加。2015年度よりセゾン文化財団ジュニアフェロー。2017年に『シティⅢ』で第17回AAF戯曲賞大賞受賞。









『午前4時』

発行人 鈴木基生

著者 カゲヤマ気象台

企画 大東翼

デザイン 桑田亜由子

